

原蛇 ウロボロス ουροβόρος 又は 自然 フュシス φύσις

Siveeyeah 著



はむら じょうけんしょうてい
萩郷村 貞観正國寺の住職の倅 同源叭羅斗は生まれながらのパンク・ロッカーで金髪を青丹のように尖らせている。77年ジョニー・ロットンJohnny Rotten 風だ。

あまひやうしやう
ダジバンのハンドルを操って眞神村の天平葦蕭の家の立派な門をくぐらせると、樹齡数百年の太木が生い繁る広い庭に停め、玄關で呼ばわり、奴なら蔵に居るよと言われ、広大な母屋を廻り、漆喰仕上げ土壁の蔵へと着くと、確かに大きな錠の付いた分厚い扉が開いていた。

「おうい、居るか、葦蕭 オレだ、叭羅斗だ」

やや間を置いてから彼の声が。

「上の階だ。来いよ」

これが昨今の夏のような猛暑なら御免蒙りたいところだが、幸いにも桜花爛漫の心地よい春である。

「わかった。行け」

上がってみると、薄暗く埃っぽく微塵い中の一条の羊場所で、古い和綴しの冊子を片手に遠い眼をしている。

「どうしたんだい、ぼんやりして」

「君、そ何か用か」

「冷たいこと言なよ。遊びに来たんだぜ。太学の入学祝いも兼ねてな。」

いや、実はバンドを復活させたくてさ。イタルがあんな死に方して、まだ一年にしかないが。別に奴も休止を望んでるわけじゃないと思っぜ。復活を望んでるかどうかは知らんがな」

「考えたくないな。……ふ。死か。誰にも答えられない。知ったときは理解できない。知らせることも」

「何だい、オレはてっきりおまえの……だから回字の志に燃えて不敵な微笑を浮かべていると思っただけ。他の連中ならともかく、おまえなら」

「そっか」

「その手にしているものは何だい」

「これか？ ここにあつたんだ。家の者には忘れ去られてさ。……いつかがあるから意外に古本屋って蘭丸は大事なのかもな」

「へー。何言ってるんだか全然わかんないけど、見せてみるよ」

あまひやうしやう

天平寺痴癡狂は明治九年十一月に眞神村で生まれ、明治 王八年に上京し、東京専門学校（現在の早稲田大学）政治科に入学した。だが両親の期待も虚しく、幼少の頃からの読本好きが嵩し、一年と経たぬうちに小説を書くようになった。奇しくも坪内逍遙が『小説神髓』を発表した頃である。

処女作『水仙の華、脳漿に裂く』は出来がよかったため、不安と期待を抱きながら彼は何人かの友人に読んで聴かせた。

意外にも評判がよく、当時としては奇怪な前衛小説であったが、骨子がロマン主義的な物語のせいもあり、北村透谷 明治五年・明治 十七年 を知るといふ学友から当時創刊間もない『文藝東』に掲載して貰えるよ

う話で、君のこの作品なら確実に載せてもらえよ」と言われた。北村透谷は明治十六年から十九年まで東京専門学校に在籍していたとされている。その縁でもあったのであつた。

尚『文藝界』とは今日、文芸春秋社から出版されてよく名の知られた同名の雑誌とはまったく別物で、主に二十歳くらいの青年たちによって作られた明治の同人誌に過ぎず、明治二十二年で終焉となったが、樋口一葉や上田敏、田山花袋、島崎藤村など、今から見れば錚々たるメンバーが参加していた。

習過、学友が下宿まで来て、掲載の件は決まったと告げる。

創刊号、千五百部が完売した雑誌への掲載決定に、昏痴龜伴はとても喜んだ。その喜悅は未だ曾て感じたことのない、えも言えぬものであつた。しかしそんな有頂天も続かず、友人伝いに『あんな小説なんて、青臭いガキの思ひ上がり、くだらないこと極まりない、あんなものを学生風情の雑誌とは言え、印刷して人目に曝すなんて恥知らずもいいところ、そんなに目立ちたいか、名を売りたいか、文筆家先生様と言われたいか』などとゆえもない罵倒をする者がいるのだと聞え、憤懣める方なく思い、元禄十五年に霊水が湧き出したという水稲荷神社に詣でて神に言挙げた。

「我が作は眞実正義のため、魂の昂揚のために書いたもの、評判や世俗の栄華や名誉を得るために書いたものでありません。例え誰も読まなくとも結構です。潔く神に捧げます。むしろ神の嘉納に与^{あず}かれればそれが本望です」

そう言い切つて清々した気持ちで神社を後にする。善いことをして何か善い報いがあるかのようにな気さえていた。

すると、どうだろう。手紙が来て、掲載の件は仔細があつて取り止めとなつた旨、通知が来る。終日落胆し、夜も更けかけた頃、悶々として布団に入り、ようやくうつらうつらすると夢に白鬚の神が現われ、何か望むことはあるかと問われた。

まさか水稲荷の神様ではと思つたものの、様子がどうにも稲荷の神様ではない。どちらかと言えば郷里よく見かける神様のよう。しかし憚つて敢えて尋ねず、応えた。

「畏れ多いことです。私は無欲です。も敢えて問われれば我が作が一人でもよいから誰かに読まれることです」

昏痴龜伴は神の心厚き若君だったので、控へ目にそう言つた。ところが、神は憤懣の相に変わり、

「おのれ、何を申すか。神に捧げられたものを人々に触れさせるものか」

昏痴龜伴はそのとき悟つた。何ゆゑ決まっていた掲載が取り止めになつたかを。そして理不尽に想つ。

「あゝ、何と言つて、善行をして褒美あるどころか、むしろ物書きの望みを絶たれるとは。あゝ、神という存在は人の願いとは何と異質なるものか」

そう歎して已まない。

しかし彼の不幸はそれに終わらなかつた。その数年後、二十歳の若さで結核により世を去るのである。もしかしたら畜獸の功績を認められ、神に呼ばれたのかもしれない。

今吾人は彼の絶筆とも言える随想文を手に行っている。それにはこう書いてあつた。

『草は日の光を浴び、水を吸つて茎を養ひ、葉を繁らせ、蕾を膨らませ、花を咲かせて実を結び、種を落とす』

ます。

人の心も脳的作用とすればこれと何か変わるものでしょうか。愛も友情も恋情も、思想も哲学も、史義も貞節も、経験も叡智も、すべて科学的な現象ではないでしょうか。

当事者にとつて何かであつても、事實は無味乾燥で意味などとは縁のない、単なる物的現象なのでしょう。現象の内部、渦中にある我々には切実な現象であつても、外からあるが俛にその事象を見れば、単なる、何者かですらない、いや、それでさえもない、嗚呼、まるでメヴィウスの輪か、自らを喰ひ尽くそうとする蛇のよう、どこにも着しない、どこにも辿り着けない、ただ蛇口の水や月の満ち欠けや風雲や春夜の蛙の鳴き声や裂けた蟬や野兎の糞や瓦斯灯の炎や卓袱台や椀や箸があるばかり。

我々は自分の意図で欲し、考え、理解し、行動していると思っています。自由意志が人にはあると想っています。

しかしそうでしょうか。ただ我々にはそう感じられるように仕組みられているだけではないでしょうか。我々も又一つの自然であり、自然現象ではないと誰が言い切れるのでしょうか。そう思えば逆に、虫の擬態や草木の花が蜂を呼び寄せ、巧みに受粉する仕組みなど、まるで考えがあつて企てた智略のように見えます。

我々の思考も又自然の思考なのです。そういう意味では何千年も前から生きていて、永遠に死ぬことはないのです。我々は生まれてはいないのです。

現象に過ぎない、空疎な架空で、形骸の『生きがい』や『物事の良し悪し』や『人生の意味』や『成功・栄誉・誤謬・敗北・資産・贅沢・不遇』等々、一体何でありましょうか。この病さへも』

これを読むたびに、吾人は皆さ沈黙歎きに鬱々と耽つてしまふのである。そして言いしれぬ寂寥と不安に捉えられる。人の生とは何と儚いものであつたか。

書肆文雅堂主人 郷土史研究家 天々薩羅羅之丞 著

『眞神の文豪 明治篇 第一部 第八章 天平寺痴龜祥伝』全文

『親戚か?』

叭羅蜜斗が訊いた。

『いや。天平の姓を持つ者は、この土地にはたくさんいるよ。古い氏族だからね。遠い縁はあるかもしれないが、まったく他人と言つていい』

『そつだらうな』

『それより君は何も感しないのか』

叭羅蜜斗は頷き、

『ああ。だつてコンチキショウの言つておりだぜ。』『一体何であつたのでしょうか。So What (ソ・ダ・ア・ン・グ)』
普蘆が少し笑つた。

『そのとおりさ。……そんなタイトルがあつたな。ふ。マイルス・デイビスを聴きたくなったよ』